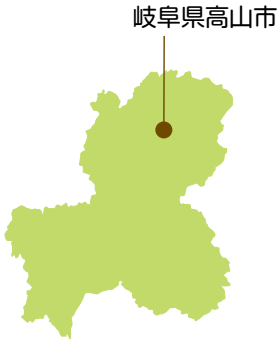
風土に合う農産物を栽培し、女性の感性で加工・販売に取り組む

株式会社寺田農園

※2018年3月現在

代表者名	寺田　真由美	資本金	3百万円
設立年	2010年4月28日	売上高	58百万円（2016年12月期）
事業内容	生産（トマト、コメ）、消費者直売、加工・製造	経営規模	田1.3ha、畑1.9ha、加工施設174㎡（清涼飲料水、ソース類）
従事者数	14人（うち女性9人。女性内訳：役員1人、一般職4人、常勤パート4人）		
女性活躍支援	［女性に配慮した取組み、実績のある制度・支援］ 産前産後休業、育児休業、育児休業代替要員を確保、家族経営協定締結 ［女性に配慮して取組んだ環境整備］ 施設設備関係（休憩室・屋内・野外トイレ）、重労働等の業務改善		



経営概況

株式会社寺田農園は岐阜県高山市丹生川町に位置し、飛騨の高原地帯でトマトのハウス栽培、加工・直売を行う。従事者数は10名で、全スタッフの約3分の2を女性が占めている。

トマト、コメなどを生産する専業農家だったが、2010年の法人化以降は、トマトの加工・販売にも本格的に着手。現在は、無塩・無添加にこだわったトマトジュースなどを自社工場で製造するほか、受託加工にも取り組む。トマトの収穫・出荷の最盛期は7月～10月。青果として出荷するトマトは熟す前に収穫するが、ジュースには完熟したトマトや規格外品を使用する。品種ごとの特性も活かし、トマトのおいしさを存分に味わえる製品に仕上げており、初年度の200本から着手、現在は年間3万本以上を生産するまでになった。

2014年には飛騨高山の古い町並みの一角に直営のアンテナショップ「庄兵衛さん家のとまじゅう」をオープン。トマトジュースが味わえるカフェコーナーを併設し、素材の味を大切に安心して食べてもらえる商品づくりをコンセプトにした加工品は、お土産としても人気である。こうした加工品の売上げ増加や、トマトの栽培面積の拡大や、単収の向上により2016年度12月期の売上高は5,835万円と前年度より約100万円増加した。

1．経営者の理念・意識改革

代表の寺田真由美氏は21歳だった1997年、農家の正樹氏と結婚し、農業の世界に飛び込む。非農家出身で農業の知識はなかったが、同じ境遇の主婦仲間と共に、農業改良普及員から農業を基礎から学ぶうちに、農業に打ち込むようになった。

2005年には家族経営協定を締結。正樹氏はすべての総括とその把握・管理、真由美氏はトマトの出荷調整や、経理などを担当し、役割分担を明確化。2010年、法人設立の際は、「女性が顔に

なるといい」という正樹氏の提案で、夫婦で共同代表となった。

しかし2013年、正樹氏が突然亡くなる。真由美氏は事業を引き継ぐ決心をしたものの、一人で代表を担う大変さを痛感したという。特に、当時正樹さんが担当していた加工部門や肥培管理は、「何がわからないのかがわからず、判断できない」状態だった。そこからスタッフとともに勉強し、すべてを記録。この時作成したマニュアルが現在の経営の礎となっている。名実ともに経営者となった真由美氏は、「食卓に新鮮で安全なおいしさを届けたい。子供たちを“おいしい笑顔”にするものづくりをしたい」という理念を掲げ、義父で役員の正一氏が見守るなか、自分なりの新しい農業スタイルを実行している。

2. 女性が働きやすい環境の整備

就業規則には産前産後休業・育児休業・育児休業後の継続就業などが記載され、女性が安心して働ける制度を整備している。その一方で、真由美氏は子育て中の勤務について細かくルール化するのは難しいとも感じており、規則の範囲内であれば、ある程度本人の判断に任せる形でゆるやかに運用している。スタッフには、小さな子供がいる人や、現在産休中の人がおり、真由美氏自身も10歳の子供がいる母親であることから、仕事と子育てが両立できる環境づくりを行っている。「ここにおりたいと思わせるのが私の仕事」という真由美氏。女性が働きやすい職場環境に取り組んできた結果、地域では女性に人気のある職場として評価が高く、スタッフの定着率もよい。

3. 女性のアイディアを活かした販売戦略

販売部門の主力は女性で、生産部門、加工部門の商品開発・衛生管理、デザイン・WEB部門、アンテナショップでも活躍する。「自分の子供に食べてもらいたいかどうか」という母親目線を活かし、減農薬栽培や、素材の力を最大限に活かした商品開発に取り組む。「飛騨らしさ」を表現した飛騨弁のネーミングやパッケージデザインも女性たちが考案したものである。

直営アンテナショップの責任者は真由美氏の妹が務める。消費者目線での対応を心掛けており、ジュースを使った料理の提案など、販売している素材にひと手間加える工夫を伝えることが購買層の拡大につながっている。

4. 人材育成への取り組み

非農家出身で一から農業を学んだ自身の経験から、「農業をしたい！」という女性や若者の育成に注力しており、昨年は農業大学校卒業生も採用した。社員が独立する際は、自社の農地やハウス、機械類を貸し出すなど支援。地域農業の発展・後継者育成にも貢献している。

また、休憩やお昼ごはんの時間は、スタッフ間のコミュニケーションを大切にしている。部署の違う人たちとも課題を共有し、全員に周知したうえで方針を決めている。真由美氏は「どの部署にいても農家の誇りをもってやってほしい。生産者の思いを実現できるよう同志を育てていきたい」と、謙虚に、だが力強く語る。

審査委員の声

目の覚める経営体に出会った。代表の寺田真由美氏は1997年21歳で結婚。家族経営協定、法人設立時夫との共同代表等、周りの理解・支援は彼女を育成する温かな土壌となった。しかし2013年夫を亡くした。その後現在の経営に至るまでの努力は並大抵のものではなかったであろう。商品開発、壁の無い職場スタッフとの連携、温かく見守る義父。真由美氏の謙虚さと力強さは人に深い感銘を与える。WAP100の理念4つを備えた素晴らしい経営体である。